

# その名にちなんで

2007(平成19)年10月30日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★★



監督・製作＝ミラー・ナイル／原作＝ジュンバ・ラヒリ『その名にちなんで』（新潮社刊）／出演＝カル・ベン／イルファン・カーン／タブー／ジャシнда・パレット／ズレイカ・ロビンソン（20世紀フォックス配給／2006年アメリカ映画／122分）

## 第1章

映画は監督で観る！

……これはインド生まれの女性監督の視点によって、インド人家族の絆を描いた感動作！ 生まれた子供は「ゴゴリ」と名づけられたが、「その名にちなんで」一体何が……？ それが、この映画のテーマ。島国ニッポン的な視点でしかモノが見れない多くの日本人は、インド人の優秀さを再認識するとともに、こんな映画から国際感覚を磨く必要があるのだが……？

## ミラー・ナイル監督は、河瀬直美監督以上に著名な国際的女性監督！

1997年にカンヌ国際映画祭でカメラ・ドール賞（新人監督賞）を受賞した、1969年生まれの子の日本の河瀬直美監督は、今年2007年第60回カンヌ国際映画祭で最高賞パルム・ドールに次ぐグランプリ（審査員特別大賞）を受賞して一層世界に羽ばたいた。

これに対して1957年にインドで生まれたミラー・ナイル監督は、1988年の長編デビュー作である『サラーム・ボンベイ！』でカンヌ国際映画祭カメラ・ドール賞を受賞した他、英米のアカデミー賞、ゴールデン・グローブ賞、セザール賞で外国語映画賞にノミネートされるなど、国際的に高い評価を受けた。そして、続く『ミシシッピー・マサラ』（91年）でベネチア国際映画祭の技術貢献賞を受賞し、インディペンデント・スピリット賞にもノミネート。さらに『モンスーン・ウェディング』（01年）でベネチア国際映画祭の金獅子賞を受賞し、ゴールデン・グローブ賞、英アカデミー賞、サテライト賞などの外国語映画賞候補になるなど、ものすごい国際的活躍をしている女性監督とのこと。もちろん私はこれらの作品を聞いたことはなかったし、今回の『その名にちなんで』も、誰のどんな映画か全く知らないまま鑑賞。さて、そんな国際的に著名な女性監督が描く、家族のドラマとは……？

## JR 福知山線列車脱線事故以上の大惨事が……？

映画の冒頭、列車に乗る若き日のアショケ（イルファン・カーン）の姿が映し出される。時は1974年。コルカタの学生であるアショケは今、ジャムシェドプルに住む祖父を訪ねるための旅の途中だ。インドは広いし、地理も全然知らないから、コルカタからジャムシェドプルまで列車でどれくらいかかるのかわからないが、寝台風の座席になっているところをみると、数十時間、いやひょっとして2、3日……？

「何を読んでいるの？」と声をかけてきた初老の男に対して、アショケは「ゴーゴリの短編集」と答えたが、その男はさかんに「海外に出て経験を積み」とアドバイス。アショケは小さい時から「本を読むことが旅することだ」と教わってきたのだが、この男の人生観はそれとは全く違うらしい。そんなことをアショケがいろいろと考えていると、突然列車が大揺れに揺れて転覆事故。その後一瞬映し出されたその惨状は、2005年4月にJR西日本福知山線の塚口～尼崎間で発生した列車脱線事故以上だ。さて、アショケは、そしてあの初老の男の命運は……？

## ここにもインド人の優秀さが……

列車転覆事故から奇跡的に救出されたアショケは、あの初老の男のアドバイスに従って、3年後の今アメリカに渡り大学で工学を学んでいた。そして今日は、故郷のコルカタで親の薦めるアシマ（タブー）との見合いの日。インドの見合いの習慣がどんなものか私は全然知らないが、この映画で観る限り、双方の家族が集まってざっくばらんに話し合っているだけの感じ……？

アショケ側の心配は、アシマがインドを離れて本当にアメリカ行きをオーケーしてくれるかどうかということだが、その点アシマは料理の他に英語が得意だったから何とかクリアー。そして、「家族や友達と離れ、アメリカでひとりになっても大丈夫か？」と問うアショケの父に対して、「ひとりじゃなく、ふたりでしょう？」とアシマが答えたことによって、このお見合いは見事に成立……。その後の盛大な結婚式の様子を含めて、インドでのお見合いと結婚式の様子をしっかりと鑑賞したいものだ。

それにしても、アショケが若くして1人でアメリカに渡った決断もすごいが、こんなに簡単に（スムーズに？）アメリカに嫁いでいくことをオーケーしたアシマの決断力もすごい。また私たち日本人が見逃してはならないことは、2人の勇気と決断には

それ相応の知性（優秀さ）を伴っていたこと。言葉や文化、習慣の違いがあるのは当然だが、彼らがそれを乗り越えアメリカで成功し、それなりの社会的地位や収入を得ることができたのは優秀な頭脳があるため。これは原作者のジュンパ・ラヒリも同じだ。ちょっとしたファッションのノリでアメリカ留学を考えている甘ちゃん日本人が多い中、アショケの単独留学の決断とそんなアショケとの結婚を決意し、アメリカに渡ったアシマの決断の意味を、きちんと評価しなくちゃ。

## タイトルの重みをしっかりと

この映画はアメリカ映画ながらインドのベンガル人が主演という珍しいものだから、多分邦題のつけ方は難しく、かなりの工夫が必要だったのでは……？ そう想いながら私は『その名にちなんで』という邦題と原題を対比しようとした。この映画の原題は『The Namesake』。こりゃ、一体どんな意味……？

これを「ナメサケ」と日本語風に読んではダメ。誰でも知っている英語「name」（ネイム）と「sake」（セイク）（～のため）が合体した英語が「namesake」。すなわち、「その名にちなんで」というわけだ。なるほど、なるほど……。

またこの映画の原作は、インドのコルカタからの移民（ベンガル人）を両親にもつ、1967年生まれ的女性ジュンパ・ラヒリが2003年に発表した初長編『The Namesake』。したがって、この邦題は、何の工夫をこらしたものでなく、原題そのもの。

そんなことを前提としたうえで、この映画を鑑賞するにあたっては、そのタイトルの重みをしっかりとかみしめたいもの。すると次に「その名とは？」と興味が続くはずだが、それがこの映画では「ゴーゴリ」。さて、それは一体何の名前……？

## 君は「ゴーゴリ」を知ってる……？ 『外套』を知ってる……？

アシマがアメリカでの生活によく馴れてきた頃、アショケとアシマの間に最初に生まれたのは元気な男の子。インドのコルカタでは、正式な名前が決まるまで子供を愛称で呼ぶ慣習があるらしいが、アメリカでは出生証明書に名前を書くことが必要。そこでアショケがとりあえず（？）名づけたのが「ゴーゴリ」。これは、あの列車転覆事故の時に読んでいた本の作家の名前だが、それは一体なぜ……？

その理由の第1は、アショケが作家ゴーゴリを尊敬していたから。しかし、アショケにとってはそれだけではなく、もう1つの理由があった。それは、あの列車転覆事

故の中、アショケが『ゴゴリ短編集』の切れ端を持っていたことによって奇跡的に救出されたから。つまり、アショケにとって長男の誕生は、あの事故の中で生き延びることができた奇跡に続く、「2番目の奇跡」だったわけだ。

ところで、君はロシア作家ニコライ・ゴゴリを知ってる……？ また、彼の『外套』という短編を知ってる……？ ロシア文学が大好きだった私は、トルストイとドストエフスキーそしてチェーホフはたくさん読んでいるが、残念ながらゴゴリの『検察官』や『外套』、『死せる魂』などはきちんと読んでいない。高校生になったゴゴリ（カル・ペン）が授業中に習った作家ゴゴリの評価は、皮肉屋、変わり者というあまり芳しいものではなかったから、その名をつけられたゴゴリにとっては迷惑千万。たかが名前ではなく、されど名前なのだから……。そんな、「その名にちなんだ」父子間のストーリーが、中盤から少しずつ展開されていくことに……。

## 女性の原作を、女性の監督が、女性の視点から……

この映画前半の主人公はアショケ、そして後半の主人公は息子のゴゴリと思いがちだが、実はそうではない。アショケの妻であり、ゴゴリの母親であるアシマがこの映画のホントの主人公。私はそう理解している。

両親と共にインドのタージ・マハルを見学した時に、専攻を建築と決めたゴゴリは、大学卒業後、今は建築家として自立していた。そんな、性格も良く頭もいいゴゴリは、ベンガル人ながらたくさんのアメリカ人のガールフレンドがいたのは自由の国アメリカでは当然。その代表が金髪の美しい女性マクシーン（ジャシンダ・バレット）で、ゴゴリは既にマクシーンの両親とも家族同然の交際を続けていた。

息子は17歳にもなれば親元を離れていくもの。アシマは友人たちからそう聞かされるものの、やはり寂しい気持はどうしようもなかった。それに追い打ちをかけたのが、オハイオ大学で教鞭をとるため単身赴任していた夫アショケの、心臓発作による突然の訃報。これによって、せっかくアメリカで築いてきた社会的地位や家族の絆が崩壊し、アシマは一人ぼっちに……。こんな風に揺れ動くアシマの気持を、女性作家の原作を女性監督が女性の視点からしっかり描いていくところが、この映画のポイント。

親は親、息子は息子と割り切り、完全にアメリカ文化の中に入り込んだつもりとなり、その挙げ句に、アメリカ人女性マクシーンとの結婚についても断固親を説得すると宣言していたゴゴリだったが……。？

2007(平成19)年10月31日記